13　天界の対応が地上のすべてのものとある

一〇三　対応とは何か前章で述べました。またそこに、生きている身体のすべてと個々のものは対応するものであることも示しました――そこで、順序として、地球のすべてのものは、また全般的に世のすべてのものは対応するものであることを示します。

一〇四　地球にあるすべてのものは、三つの種類の「界」と呼ばれるものに区別されます。すなわち、動物界・植物界・鉱物界です。

動物界の中のものは、生きているので、第一の段階における対応するものです。植物界の中のものは、ただ生長するだけなので、第二の段階における対応するものです。鉱物界の中にあるものは、生きていないし、成長もしないので、第三の段階における対応するものです。

動物界で対応するものは、地上を歩くもの、這うもの、同じく空中を飛ぶものといったいろいろな種類の動物です。それらの名前は知られているので特に挙げません。

植物界で対応するものは、庭園・森・畑・平地の中で生長し、花が咲くすべてのものです。それらの名前もまた知られているので挙げません。

鉱物界で対応するものは、貴金属や卑金属、貴重な石、また普通の石、いろいろな種類の土、さらにまた水です。さらにまた、それら鉱物界のものから人間の活動により役立ちのために備えられるすべての種類の食べ物・衣服・家・建物、その他多くのものにも対応するものがあります。

一〇五　地球の上方にあるもの、例えば、太陽・月・星、また大気の中のもの、例えば、雲・霧・雨・稲光・雷鳴もまた対応するものです。

太陽の出没により生じるもの、例えば、光と陰、暑さと寒さもまた対応するものです――同じく、これに続いて、例えば、春・夏・秋・冬と呼ばれる一年の期間や、朝・昼・夕・夜といった一日の時間も対応するものです。

一〇六　一言でいえば、自然の中に存在するすべてのものは、その最小のものからその最大のものまで、対応するものです。[*1]

対応するものであるのは、自然界がそのすべてのものとともに霊界から、またその二つの世界とも神的なものから存在し、存続するからです――存続すると言ったのは、すべてものは存在するものから存続し、さらにまた存続は不断の存在であるからです。また何らかものはそれ自体から存続することができないで、それ自体よりも前のものから、こうして〝最初のもの〟から、存続するからです。そこで、もし前のものから分離されるなら、完全に滅び、消えます。

＊1　世とその三つの界のすべてのものは天界にある天的なものに対応する、すなわち、自然界の中にあるものは霊界の中にあるものと対応する（一六三二、一八八一、二七五八、二七六〇～二七六三、二九八七～三〇〇三、三二一三～三二二七、三四八三、三六二四～三六四九、四〇四四、四〇五三、四一一六、四三六六、四九三九、五一一六、五三七七、五四二八、五四七七、九二八〇番）。
対応によって自然界は霊界と結合されている（八六一五番）。
ここから全自然は主の王国を表象する劇場である（二七五八、二九九九、三〇〇〇、三四八三、三五一八、四九三九、八八四八、九二八〇番）。

一〇七　自然の中で神的な秩序から存在し、存続するすべてのものは、対応するものです。

主から発出する神的善が神的な秩序をつくります。神的な秩序はその方から始まり、その方から発出し、天界を通って連続的に世の中へ、そして世の最終的なものの中で終わります。

対応するものはその秩序にしたがっています。

善であり、役立ちに向けて完全になっているものすべては、その秩序にしたがっています、なぜなら、すべての善は役立ちにしたがった善であるからです。真理は善の形であるので、形は真理に関係します。

ここから、神的な秩序にしたがって全世界の中と自然の世界にあるすべてのものは、善と真理に関係します。[*2]

一〇八　世の中のすべてのものが神的なものから存在するようになり、自然の中に存在し、役立ちを果たし、こうして自然の中で対応することができるようなものを着せられていることは、動物界と同じく、植物界に見られる個々のものからきわめて明らかです。もし内的なものから考えるなら、両方の界にこのようなものがあり、それらは天界から存在することを、だれもが見ることができます。

無数にあるものから、説明のために少しばかり記述しておきます。最初に、〝動物界〟の中のものからです。

どの動物でも、あたかも植えつけられたかのような知識をもっていることが、多くの者に知られています。

ミツバチは花から蜜を集め、蜜蝋から小室を作り、その中に蜜をたくわえ、このように自分自身や仲間の群れに、さらにまたこれから来る冬のために、食べ物を備えることを知っています。女王バチは卵を産み、他のハチは仕え、それらの卵をおおいで包み、ここから新しい子孫が生まれるようにします。すべてのハチは、植えつけられたものから、ある王国の形の中に生きて、役に立つハチを守り、役立たないハチの羽を奪っ

て追い出すことやその他にも驚くべきことを知っています。それらは彼らに天界から役立ちのために与えられています。全世界の人類に、蝋はろうそくとして、蜜は食べ物の味つけのために役立つからです。

[2]動物界で最下等である小さい虫には何があるでしょうか？

虫は、自分に適する葉の液汁から滋養物をとり、その後、定まった時に、いわば胎内に入るかのようにして、自分のまわりにおおいを着せ、このように自分たちの種族の子孫を孵化することを知っています。

あるものは最初に若虫やさなぎに変わり、糸を作り出し、苦労を重ねた後、羽で装飾された別のからだで飾り、その虫の天界かのように、空中を飛び、結婚を祝い、卵を産み、自分たちの子孫を備えます。

[3]これらの他に特に、空を飛ぶ動物は全般的に、滋養物となる自分の食べ物を、その食べ物がどんなものであるかだけでなく、どこにあるかも知っています。他とは異なった自分の巣を作ること、そこに卵を産み、その上に座り、ひなを孵化すること、育てること、ひなが自分の責任でできるようになったとき家から追い出すことを知っています。さらにまた、避けなければならない敵や仲間となれる友を最初の幼いときから知っています――卵そのものの中の驚くべきことについては言わないことにします。そこには、ひなが形成され始めるためのすべての滋養物が、秩序のうちに、準備されています――この他にも、無数のものがあります。

[4]何らかの理性的な知恵から考える者が、「これらは霊界以外の別のところからのものである」などと言うでしょうか？自然的なものは、霊界からのものにそれ自体を着せるために、すなわち、身体として仕え、原因であ

＊2　秩序にしたがっている全世界の中のすべてのものは、天界と同じく世の中のものも、善と真理に関係する（二四五一、三一六六、四三九〇、四四〇九、五二三二、七二五六、一〇一二二番）。
また、何らかのものであるために、〔善と真理の〕両方の結合に関係する（一〇五五五番）。

る霊的なものが結果の中にあるようにするために仕えます。

地上の動物や空を飛ぶ動物は、それらのすべての知識の中に生まれています。それでもそれらの動物よりもすぐれている人間はそれらの知識に生まれていません。その理由は、動物は自分のいのちの秩序の中にいて、理性的なものはないので、霊界から自分の中にあるものを滅ぼすことができないからです――霊界から考える人間は異なっています。人間は、理性に賛同して、霊界から自分のもとにあるものを秩序に反した生活によって滅ぼしたので、それゆえ、無知の中に生まれることしかできないで、その後、神的な手段によって天界の秩序の中に戻されるのです。

一〇九　植物界にあるものがどのように対応するか、多くのものから明らかにすることができます――例えば、小さな種が木に生長し、葉を出し、花を、その後、実を生み、その中に再び種をもたらしますが、これらのことは、簡単に記述することができないような驚くべき秩序で、連続的に生じ、存在するようになっています。何冊もの本によっても、それでもそれらの役立ちの内的なアルカナについて、その知識に近づき、その知識を余すところなく述べることはできません。

これらのものもまた霊界から、または人間の形をしている天界からのものであるので(そのことは前章で示しました)、ここから、植物界の個々のものもまた、人間のもとにあるようなものと関係をもっており、学界の中にも、このことを知っている者がいます。

植物界にあるすべてのものもまた対応するものであることは、私にとって多くの経験から明らかです――私はしばしば庭園にいて、木・実・花・野菜を観察し、天界の中のそれらに対応するものに気づいたからです。

私は天界にいた者と話し、対応するものがどこからか、どのようなものであるか教えられました。

一一〇　しかし、世の自然的なものが対応している天界の霊的なものを知ることは、対応の知識が今日ではまったく失われているので、天界から知らされるのでないなら、今日ではだれにもできません――けれども、自然的なものと霊的なものとの対応がどのようなものであるか、いくつかの例によって説明します。

地上の動物は全般的に情愛に対応し、おとなしくて役に立つものは善の情愛に、獰猛(どうもう)で役に立たないものは悪の情愛に対応します。

特に、牛と若い牛は自然的な心の情愛に、羊と子羊は霊的な心の情愛に対応します。けれども、飛ぶ動物はその種類にしたがって、自然的な心と霊的な心の両方の知的なものに対応します[*3]――ここから、表象的な教会であったイスラエル教会では、いろいろな動物から、例えば、牛・若い牛・雄羊・羊、雌ヤギ・雄ヤギ・子羊と雌の子羊、同じくハトとキジバトもまた、いけにえと全焼のいけにえとされ、聖なる役立ち〔礼拝〕の中で受け入れられま

＊3　動物は対応から情愛を意味する。おとなしくて役に立つ動物はよい情愛を、獰猛で役に立たない動物は悪い情愛を意味する(四五、四六、一四二、一四三、二四六、七一四、七一六、七一九、二一七九、二一八〇、三五一九、九二八〇番)。**霊界からの経験による説明**(三二一八、五一九八、九〇九〇番)。
獣のいのちの中への霊界の流入について(一六三三、三六四六番)。
牛と若い牛は対応から自然的な心の情愛を意味する(二一八〇、二五六六、九三九一、一〇一三二、一〇四〇七番)。
羊とは何か(四一六九、四八〇九番)。小羊とは何か(三九九四、一〇一三二番)。
飛ぶ動物は知的なものを意味する(四〇、七四五、七七六、七七八、八六六、九八八、九九一、五一四九、七四四一番)。
その属と種にしたがって変化をもって。**霊界からの経験から**(三二一九番)。

した。その役立ちの中で、それらは霊的なものに対応しており、天界では対応にしたがって理解されたからです。

さらにまた、動物がその種と属にしたがって情愛であることは、生きていて、それぞれのいのちは情愛以外のどこからのものでもなく、情愛にしたがっているからです。ここから、どんな動物にも、そのいのちの情愛にしたがって生来の知識があります――人間もまた自分の自然的な人間に関しては動物に似ています。それで、普段の話しの中で、動物にたとえることがあります、例えば、おとなしい人なら羊または子羊と呼ばれ、残酷な人ならクマまたはオオカミ、狡猾ならキツネまたはヘビ、このように多くの動物にたとえられています。

一一一　植物界のものとも同様の対応があります。

庭園は全般的に知性と知恵に関して天界に対応し、それゆえ、天界は神の庭園や楽園と呼ばれ、[*4] 人間からもまた天界の楽園と呼ばれています。

木はその種類にしたがって善と真理の知覚と知識に対応し、それから知性と知恵がもたらされます。ここから、対応の知識の中にいた古代人は、自分たちの聖なる礼拝を杜（もり）の中で行ないました。[*5] またここから、みことばの中にはしばしば木の名前が挙げられ、天界・教会・人間がそれらの木に、例えば、ぶどうの木・オリーブの木・杉その他にたとえられ、行なう善は実（み）にたとえられています。

木からの食べ物は、特に畑の穀物からの食べ物もまた、善と真理の情愛に対応します。その理由は、自然的なものが地の食べ物で養われるように、霊的ないのちがそれらの情愛により養われるからです。[*6]

ここから、パンは全般的にすべての善の情愛に対応します、パンは他のものにまさっていのちを支え、パンによってすべての食べ物が意味されるからです――その対応ゆえに、主もまたご自分をいのちのパンと呼ばれました――そしてまたパンはイスラエル教会で聖なる役立ち〔礼拝〕に用いられました。というのは、幕屋の中の机の上に置かれ、供えのパンと呼ばれたからです――いけにえと全焼のいけにえによって行なわれた神的な礼拝のすべてもまたパンと呼ばれました。その対応ゆえに、キリスト教会の中の最も聖なるものである聖餐でもまたパンとぶどう酒が与えられます。[*7]

これらのわずかなものから対応がどのようなものか明らかにすることができます。

＊4　庭園と楽園は対応から知性と知恵を意味する（一〇〇、一〇八番）。**経験から**（三二二〇番）。対応するすべてのものは、みことばの中でもまた同じものを意味する（二八九六、二九八九、二九九〇、二九九一、三〇〇二、三二二五番）。

＊5　木は知覚と知識を意味する（一〇三、二一六三、二六八二、二七二二、二九七二、七六九二番）。それゆえ、古代人は神的礼拝を杜の中の木の下で、その対応にしたがって行なった（二七二二、四五五二番）。植物界の主体の中への天界の流入について、例えば、木や植物の中へ（三六四八番）。

＊6　対応から、食べ物は霊的ないのちを養うようなものを意味する（三一一四、四四五九、四七九二、四九七六、五一四七、五二九三、五三四〇、五三四二、五四一〇、五四二六、五五七六、五五八二、五五八八、五六五五、五九一五、六二七七、八五六二、九〇〇三番）。

＊7　パンは人間の霊的ないのちを養うすべての善を意味する（二一六五、二一七七、三四七八、三七三五、三八一三、四二一一、四二一七、四七三五、四九七六、九三二三、九五四五、一〇六八六番）。幕屋の中の机の上に置かれたパンも同様のものを意味した（三四七八、九五四五番）。いけにえは全般的にパンと言われた（二一六五番）。パンはすべての食べ物を含んだ（二一六五番）。このように、天的なまた霊的なすべての食べ物を意味する（一七六、六八〇、二一六五、二一七七、三四七八、六一一八、八四一〇番）。

一一二 対応によって世と天界がどのように結合するかもまた簡単に述べておきます。

主の王国は目的の王国であり、その目的は役立ちです、すなわち、同じことですが、役立ちの王国であり、その役立ちが目的です――それゆえ、全世界は、役立ちが行動の中または結果の中のどこにでも、最初に天界の中に、その後、世の中に、このように段階によって連続的に自然の最後のものの中にまで現われることができるように、神的なものから創造され、形作られています――ここから、霊的なものと自然的なものの対応は、すなわち天界と世の対応は、役立ちを通して存在し、それらを一つに結合することが明らかです。そして役立ちが着けている形は、役立ちの形であればあるほど、それだけ対応するものであり、それだけ結合するものです。

自然界の中で、その三つの界の中で、秩序にしたがって存在するようになるすべてのものは、役立ちの形です、すなわち、役立ちにより役立ちに向けて形作られた結果です。それゆえ、そこに存在するものは、対応するものです。

けれども、人間のもとでは、彼が神的な秩序にしたがって生きれば生きるほど、したがって主への愛と隣人に対する仁愛の中に生きれば生きるほど、それだけその行動は形の中の役立ちであり、またそれによって天界と結合される対応するものとなります――主と隣人を愛することは、役立ちを全般的に実行することです。*8

さらに、人間は自然界と霊界を結合する存在であること、すなわち、結合の媒介であることを知らなくてはなりません。なぜなら、人間の中に自然界が存在し、霊界もまた存在するからです(前の**五七**番参照)。それゆえ、人間が霊的であればあるほど、それだけ結合の媒介です。けれども、自然的であって、霊的でなければないほど、それだけ結合の媒介でなくなります――それで、人間の媒介がなくては、神的なものは世の中へ、続いて世から人間のもとにあるものの中へ、人間の理性の中へ、流入しません。

一一三 神的な秩序にしたがっているすべてのものが天界に対応するように、神的な秩序に反するすべてのものは地獄に対応します――天界に対応するものは善と真理に関係し、地獄に対応するものは悪と虚偽に関係します。

---

*8 すべての善は、その快さを役立ちから、また役立ちにしたがって、その性質もまた得ている。ここから、役立ちがどのようなものかによって、そのような善がある(三〇四九、四九八四、七〇三八番)。

天使の生活は、愛と仁愛の善の中に、このように役立ちを果たすことの中にある(四五四番)。

主からは、またここから天使からは、人間のもとの目的しか見られない、それは役立ちである(一三一七、一六四五、五八五四番)。

主の王国は役立ちの王国、そのように、目的の王国である(四五四、六九六、一一〇三、三六四五、四〇五四、七〇三八番)。

主に仕えることは役立ちを果たすことである(七〇三八番)。

人間の中のすべてと個々のものは役立ちへと形作られている(三六二六、四一〇四、五一八九、九二九七番)。また役立ちから形作られている。このように役立ちが人間のもとに役立ちのもととなる有機的な形よりも先のものであるのは、役立ちが天界を通って主の流入から存在するからである(四二二三、四九二六番)。

人間の心に属すその内的なものもまた、成長するとき、役立ちからまた役立ちへと形作られる(一九六四、六八一五、九二九七番)。

ここから、人間は彼のもとの役立ちがどのようなものであるかによって、そのようなものである(一五六八、三五七〇、四〇五四、六五七一、六九三四、六九三八、一〇二八四番)。

役立ちは〔活動の〕そのための目的である(三五六五、四〇五四、四一〇四、六八一五番)。

役立ちは人間の最初のものと最後のものであり、そのように、すべてのものである(一九六四番)。

一一四　対応の知識について、またその役立ちについて今から述べます。

前に、霊界は、天界であって、対応によって自然界と結合し――ここから対応によって人間に天界との伝達が存在する、と述べました。天界の天使は、人間のように自然的なものからは考えないからです。それゆえ、人間が対応の知識の中にいるとき、その心の思考に関して天使と一つであることができ、このように天使と自分の霊的な人または内なる人に関して結合されることができます。

人間と天界が結合するために、それゆえ、みことばは対応そのものによって書かれています。みことばのすべてと個々のものは対応しているからです[*9]――それゆえ、人間に対応の知識があれば、みことばをその霊的な意味で理解して、そのアルカナを知ることができます。その霊的な意味は、文字どおりの意味の中には何も見られません――みことばには文字どおりの意味と霊的な意味があるからです。文字どおりの意味は世にあるようなものから成り立ちますが、霊的な意味は天界にあるようなものから成り立ちます。また世と天界の結合は対応によるので、それゆえ、このようなみことばが与えられ、みことばの中の個々のものは一点一画までも対応しています[*10]。

一一五　私は天界から以下のことを教えられました。

天的な人であった私たちの地球の最古代人は、対応そのものから考え、目の前にある世の自然的なものは、このように考えるために彼らに仕えるものであった。最古代人はこのようであったので、天使と交わり、彼らと話し、このように彼らを通して天界は世と結合し――そのことから、その時代は黄金時代と呼ばれた。このことについては古代の著者たちもまた、「天界の住民は人間とともに住んだ。また友と友のように人間

と交わった」と言っている。

しかし、それらの時代の後、対応そのものからでなく、対応の知識から考えた者が続き、その時も人間と天界の結合はあったが、最内部の結合ではなく――彼らの時代は白銀時代と呼ばれた。

その後、対応は知っていたけれども、その知識から考えなかった者が続き――これらの時代は銅時代と呼ばれた。考えなかった理由は、自然的な善の中にいて、前の者のように霊的な善の中にいなかったからである。

これらの時代の後、人間は連続的に外なるものに、ついに物質的になり、その時、対応の知識は完全に失われ、それとともに天界について、それと天界に属す多くのものについての知識も失われた。

これらの時代が、金・銀・銅に因んで呼ばれたのは対応からであり[*11]、金は対応から天的な善を意味し、その中に最古代人がいたからである。しかし、銀は霊的な善を意味し、その中に彼らの後の古代人がいた。銅は自然的な善を意味し、その中に続く子孫がいた。しかし、最後の時代と言われた鉄は善のない硬い真理を意味する。

＊9　みことばは対応そのものによって書かれている（八六一五番）。みことばによって人間に天界との結合がある（二八九九、六九四三、九三九六、九四〇〇、九四〇一、一〇三七五、一〇四五二番）。

＊10　みことばの霊的な意味については小著『黙示録の白い馬について』の中に見られる。

＊11　金は対応から天的な善を意味する（一一三、一五五一、一五五二、五六五八、六九一四、六九一七、九五一〇、九八七四、九八八一番）。銀は霊的な善を、すなわち、天的な起源からの真理を意味する（一五五一、一五五二、二九五四、五六五八番）。銅は自然的な善を意味する（四二五、一五五一番）。鉄は秩序の最後ものの中の真理を意味する（四二五、四二六番）。

14　天界の太陽

一一六　天界に世の太陽は見えないで、その太陽から出ているどんなものも見えません、それはすべて自然的なものであるからです。自然はその太陽から始まるので、それによって生み出されるものは何でも自然的なものと呼ばれます――けれども、霊的なものは、その中に天界があって、自然の上にあり、自然的なものから完全に分離していて、対応による以外にそれらの間に伝達もありません。

分離がどんなものであるかは、段階について前に述べたことから(**三八**番)、伝達がどんなものであるかは、前の二つの章で、対応について述べたものから理解することができるでしょう。

一一七　しかし、たとえ天界に世の太陽は見えないで、その太陽から出ているどんなものも見えなくても、それでもそこに太陽があり、光があり熱があり、そして世の中のすべてのものが、無数の多くのものがあります、しかし、同じ起源からではありません。なぜなら、天界の中にあるものは、霊的であり、世の中にあるものは自然的であるからです。

天界の太陽は主であり、そこの光は神的真理、そこの熱は神的善であり、それらは太陽としての主から発出します。天界の中に存在するようになり、見られるすべてのものは、その起源からです。

しかし、光と熱について、またそこから天界に存在するようになるものについては、あとの章で述べますので、ここでは太陽についてだけ述べます。

主が天界の中で太陽として見られるのは、神的愛であり、それからすべての霊的なものが存在するようにな

り、また、世の太陽によって、すべての自然的なものが存在するようになるからです――太陽として輝くものは主の愛です。

一一八　主が実際に天界の中で太陽として見られることは、天使から私に言われただけでなく、私は何度か見ることが与えられました。それで、太陽としての主について、私が聞き、見たことを、ここに手短に述べます。

主は太陽として、天界の中ではなく、天界の上方の高いところに――頭の上方または天頂でもなく、天使の顔の前に、中間の高さの二つの場所に、一つは右目の前に、もう一つは左目の前に、かなり隔たって見られます――右目の前には、完全に太陽のように、いわば世の太陽の火のように、大きさも似て見られます。けれども、左目の前には、太陽のようにではなく月のように、私たちの地球の月に似た大きさで白く輝くように、さらにきらめいて見られます、しかしその周囲には小さな月のような多くのものがあり、そのそれぞれが同じように輝き、きらめいています。

主が二つの場所にこのような相違をもって見られるのは、それぞれの者がどのようにその方を受け入れるかにしたがって見られるからであり、それゆえ、その方を愛の善で受け入れる者と、その方を信仰の善で受け入れる者で異なっています。

主を愛の善で受け入れる者には、受け入れにしたがって火と炎のような太陽として見られます。それらの者はその方の天的な王国にいます――しかし、主を信仰の善で受け入れる者には、受け入れにしたがって、白く輝く、きらめく月として見られます。これらの者はその方の霊的な王国にいます。[*1]

その理由は、愛の善は火に対応するからです。ここから、火は霊的な意味で愛であり、信仰の善は光に対応し、

そしてまた光は霊的な意味で信仰です。[*2]

目の前に見られるものは、心に属す内的なものであり、それを目を通して見ます。右目を通して愛の善から、左目を通して信仰の善から見ます。[*3] なぜなら、天使そしてまた人間のもとの右側にあるすべてのものは、真理のもとである善に対応し、そしてまた左側にあるすべてのものは善からの真理に対応するからです。[*4] 信仰の善はその本質では善からの真理です。

一一九 ここから、みことばの中で、主は愛に関して太陽に、信仰に関して月にたとえられ、主からのものである主への愛が「太陽」によって意味され、主からのものである主への信仰が「月」によって意味されています。例えば、次の箇所のように――

月の光は太陽の光のようになる、けれども太陽の光は七倍に、七つの日の光のようになる（イザヤ三〇・二六）。

わたしがあなたを消すとき、わたしは天をおおい、星を暗くする。わたしは太陽を雲でおおう、月はその光を輝かさない。わたしは天の中の光のすべての光源をあなたの上に暗くし、あなたの地の上に暗やみを与える（エゼキエル三二・七、八）。

わたしは太陽をその昇る中で暗くする、月はその光を輝かさない（イザヤ一三・一〇）。

太陽と月は暗くされ、星はその輝きを引っ込める。……太陽は暗やみに、月は血に変わる（ヨエル二・二、一〇、三一、三・一五）。

太陽は毛の麻布のように黒く、月は血のようになり、星は……地に落ちた（黙示録六・一二、一三）。

それらの日々の苦悩の後、直ちに、太陽は暗くされ、月はその光を与えず、星は天から落ちる（マタイ二四・二九）。

＊1 主は天界の中で太陽として見られる天界の太陽である（一〇五四、三六三六、三六四三、四〇六〇番）。
主は天的な王国にいる者に太陽として見られ、そこではその方への愛が支配している。また霊的な王国にいる者に月として見られ、そこでは隣人に対する仁愛が支配している（一五二一、一五二九、一五三〇、一五三一、一八三七、四六九七番）。
主は太陽として右目の前の中間の高さに見られ、そして月として左目の前に見られる（一〇五三、一五二一、一五二九、一五三〇、一五三一、三六三六、三六四三、四三二一、五〇九七、七〇七八、七〇八三、七一七三、七二七〇、八八一二、一〇八〇〇番）。
主は太陽として見られ、そして月として見られる（一五三一、七一七三番）。
主の神性そのものは天界の中のその方の神性のはるか上にある（七二七〇、八七六〇番）。

＊2 みことばの中の「火」は〔善と悪〕両方の意味で愛を意味する（九三四、四九〇六、五二一五番）。
聖なる火または天界の火は神的愛を意味する（九三四、六三一四、六八三二番）。
地獄の火は自己愛と世俗愛を、またそれらの愛に属すすべての欲望を意味する（一八六一、五〇七一、六三一四、六八三二、七五七五一〇七四七番）。
愛は、いのちの火であり、いのちそのものは実際にそこから存在する（四九〇六、五〇七一、六〇三二、六三一四番）。

＊3 光は信仰の真理を意味する（三一九五、三四八五、三六三六、三六四三、三九九三、四三〇二、四四一三、四四一五、九五四八、九六八四番）。
左目の視覚は信仰の真理に、右目の視覚はそれらの善に対応する（四四一〇、六九二三番）。

＊4 人間の右側にあるものは真理のもととなる善に、左にあるものは善からの真理に関係する（九四九五、九六〇四番）。

他の箇所にもあります。

これらの箇所で「太陽」によって愛が意味され、「月」によって信仰が、「星」によって善と真理の知識が意味されます。[*5] それらはもはや存在しないとき、暗くされ、光を失い、天から落ちる、と言われます。

主が太陽として天界の中に現われることは、主がペテロ、ヤコブ、ヨハネの前で変容されたことからもまた明らかです、

その方の顔は太陽のように輝いた（マタイ一七・二）。

弟子たちが身体の中から引き上げられ、天界の光の中にいたとき、主は、このようにご自分の弟子たちに見られました。

ここから、表象的な教会の中にいた古代人は、神礼拝の中にいたとき、東の太陽へ顔を向けました――神殿を東向きにしたのはこのことからです。

一二〇 神的愛がどれほど大きくて、またどんなものであるかは、最高度に燃えるものである世の太陽と比較することから明らかにすることができます。もしあなたがたに信じられるなら、それよりもさらに燃えるものです――それゆえ、太陽としての主は直接に天界の中へ流入されないで、その方の愛の熱さは途中で段階的に緩和されます。緩和するものが太陽の周囲に輝く帯のように現われます――それに加えて、天使は、流入により害われないように適当な薄い雲でおおわれます。[*6] それで、天界は受け入れにしたがって離れています。

最高の天界は、愛の善の中にあるので、太陽としての主の最も近くにあります。けれども、低い天界は、信仰の善の中にあるので、太陽から遠ざかっています――けれども、地獄の中にいる者のように、善の中にいない者は、最も遠ざかっており、善に反した対立するものの中にいればいるほど、それだけ遠く離れています。[*7]

一二一 けれども、主が天界に見られるとき、そのことはしばしば起こりますが、太陽に囲まれて見られないで、顔から輝き貫いてくる神性よって他の天使とは区別された天使の形で見られます。なぜなら、主ご自身は変わらずに太陽に囲まれているので、そこにご自身は存在されず、しかし、見ることによって現在される

＊5 みことばの中の「星」と「星座」は、善と真理の知識を意味する（二四九五、二八四九、四六九七番）。

＊6 主の神的愛はどんなもので、どれほど大きいか、世の太陽の火との比較による**説明**（六八三四、六八四九、八六四四番）。主の神的愛は、全人類を救うための彼らに対する愛である（一八二〇、一八六五、二二五三、六八七二番）。主の愛の火から発出する最も近い愛は、天界へ入らないで、輝く帯のように太陽の周囲に見られる（七二七〇番）。天使たちもまた、燃える愛の流入により害われないように、対応する薄[a]い雲でおおわれる（六八四九番）。

注a『天界の秘義』六八四九番を見よ、そこには本文のように「適当な」と書かれている。

＊7 天使たちのもとに主が現在されるのは、その方からの愛と信仰の善の受け入れにしたがっている（九〇四、四一九八、四三二〇、六二八〇、六八三二、七〇四二、八八一九、九六八〇、九六八二、九六八三、一〇一〇六、一〇八一一番）。主は、それぞれの者にその性質にしたがって見られる（一八六一、三二三五、四一九八、四二〇六番）。地獄は、主からの神的愛が臨在することに耐えることができないことによって天界から遠ざけられている（四二九九、七五一九、七七三八、七九八九、八一三七、八二六五、九三二七番）。ここから、地獄は天界から最も遠ざかっており、そのことが巨大な割れ目である（九三四六、一〇一八七番）。

からです。天界の中では、視線が定められるかまたは終わる場所に、たとえその場所が自分たちの実際にいる場所からはるかに遠く離れていても、現在するように見られるのは普通のことであるからです。その現在は内なる視覚による現在と呼ばれ、そのことについてはあとで述べます。

さらに、私は、主を太陽の外に、天使の形で太陽の少し下の高いところに見たことが、また太陽の近くに、同じ形の中に、輝く顔で見たことが、さらにまた一度は、天使たちの真ん中に炎の光輝として見たことがあります。

一二二 天使に、世の太陽は天界の太陽と反対の位置に何か暗いものとして見られ、〔世の〕月は天界の月と反対の位置に何か暗いものとして見られ、そのようであることはいつも変わりません――その理由は、世の火は自己愛に対応し、またそこから照らされたものはその愛からの虚偽に対応するからです。自己愛は神的愛と正反対のものであり、その愛からの虚偽は神的真理と正反対のものです。主の愛や主の真理と正反対のものは、天使にとって暗黒です。

世の太陽と月を崇拝し、それらに腰をかがめることはここからであり、みことばの中では、自己を愛し、自己愛からの虚偽を愛することを意味し、それらは完全に滅ぼされなければなりませんでした[*8]（申命記四・一九、一七・三〜五、エレミヤ八・一、二、エゼキエル八・一五、一六、一八、黙示録一六・八、マタイ一三・六）。

一二三 主は、ご自分の中にあって、ご自分から出るものである神的愛から、太陽として天界の中に見られるので、それゆえ、天界の中にいるすべての者は、絶えずその方に〔顔を〕向けます。天的な王国の中の者は太陽としてのその方に、霊的な王国の中の者は月としてのその方に〔顔を〕向けます――しかし、地獄

にいる者は、対立から存在する暗黒と暗やみに向け、このように主から後ろ向きになっています。その理由は、地獄の中のすべての者は、自己愛と世俗愛の中にいて、このように主に対立しているからです。

暗黒は世の太陽の場所にあって、それに向ける者は、背後の地獄の中にいて、悪鬼と呼ばれます。しかし、暗やみは月の場所にあって、それに向ける者は、前部の地獄の中にいて、〔悪〕霊と呼ばれます。ここから、地獄の中にいる者は、暗やみの中にいると言われ、天界の中にいる者は光の中にいると言われます。「暗やみ」は悪からの虚偽を、「光」は善からの真理を意味します。

来世の中のすべての者がこのように向ける理由は、彼らが自分の内的なものを支配しているものを眺め、そのように自分自身の愛を眺め、その内的なものが天使と霊の顔をつくるからです。自然界の中のように明確な方位は霊界の中になくて、決定するものは顔〔の向き〕です。

人間もまた、自分の霊に関して同様に向けています。自己愛と世俗愛の中にいる者は主から後ろ向きに、主への愛と隣人に対する愛の中にいる者は主へ顔を向けています。しかし、人間は、方位が太陽の出と入りにしたがって決定される自然界にいるので、このことを知りません――しかし、このことは人間にほとんど理解することができないので、あとで天界の中の方位・空間・時間について扱う中で説明します。

＊8 世の太陽は天使に見られないで、その場所に何か暗いものが、天界の太陽、すなわち、主と反対の位置の背後に見られる（七〇七八、九七五五番）。
「太陽」は、対立する意味で自己愛を意味する（二四四一番）。その意味で、「太陽を崇拝すること」によって、天界の愛に、すなわち、主に反するものを崇拝することが意味される（二四四一、一〇五八四番）。
天界の太陽は、地獄の中の者にとって暗黒である（二四四一番）。

一二四　主は天界の太陽であられ、主からのすべての者はその方を眺めるので、それゆえ、主はまた共通の中心であられ、その中心からすべての者の方向と位置が定まります。[*9]

またそれゆえ、天界の中にあるものと同じく地にあるものも、主の臨在と指導のもとにあります。

一二五　それでこれらから、前の章の中で主について言われ、示されたことを、さらにはっきりと光の中で見ることができます、すなわち――

その方は天界の神であられる(**二**～**六**番)。

その方の神性が天界をつくっている(**七**～**一二**番)。

天界の中の主の神性は、その方への愛と隣人に対する仁愛である(**一三**～**一九**番)。

世のすべてのものは天界と対応し、そして天界を通して主と対応する(**八七**～**一一五**番)。

さらに世の太陽と月も対応する(**一〇五**番)。

＊9　主は共通の中心であられ、そこへ天界のすべての者が向いている（三六三三番）。

15　天界の光と熱

一二六　自然だけから考える者は、天界に光があることを理解することができません。それでも天界には、世の真昼の光に数段階もまさるような明るい光が存在します。私はそれらをしばしば、夕方や夜間にも見ました。

天使が、「世の光は天界の光に比べるならほとんど陰以外の何ものでもありません」と言うのを聞いたとき、最初は驚きました。しかし、私は見たので、そのことを証言することができます。その白い輝きと明るさは、描写することができないようなものです。

天界で私が見たものは、世の中のものよりもさらにはっきりとした明瞭なその光の中で見たものです。

一二七　天界の光は、世の光のように自然的ではなくて霊的です、その光は太陽としての主からのものであり、前章で示されたように、太陽は神的愛であるからです。

太陽としての主から発出するものは、天界で神的真理と呼ばれますが、それでもその本質は神的真理と結合した神的善です。ここから天使に光と熱があり、神的真理から天使に光があり、神的善から熱があります。

天界の光は、このような起源からのものなので、自然的でなく霊的であって、熱も同様であることをここから明らかにすることができます。[*1]

一二八　神的真理が天使に光であるのは、天使は自然的でなく霊的であるからです。霊的な者は霊的な太陽から、自然的な者は自然の太陽から見ます。天使に理解力があるのは神的真理からであり、理解力は彼らの内なる視覚で

あって、それが外なる視覚に流入して、その視覚を生んでいます。ここから、天界で太陽としての主から見られるものは、光の中に見られます。[*2]

天界には光の源泉が存在するので、それゆえ、そこの光は、主からの神的真理の受容にしたがって、または同じことですが、天使の知性と知恵にしたがって変化しています――天界の光は、天的な王国と霊的な王国とでは別であり、それぞれの社会の中でも別々です。天的な王国の中の光は炎のように見られます、そこの天使は太陽としての主から光を受けるからです。けれども、霊的な王国の中の光は白く光ります、そこの天使は月としての主から光を受けるからです(前の**一一八**番参照)。

ある社会と他の社会とで光は似ていません――それぞれの社会の中でも異なっていて、その社会の真ん中にいる者は多くの光の中に、周囲にいる者は少ない光の中にいます(**四三**番参照)。

一言でいえば、神的真理の容器である天使は、すなわち、主からの知性と知恵の中にいる天使は、それと同じ段階の光の中にいるのです。[*3]

ここから、天界の天使は光の天使と呼ばれます。

一二九　主は天界の中で神的真理であられ、そこでは神的真理は光なので、それゆえ、みことばでは次の箇所のように、主は光と呼ばれ、同じく主からのすべての真理も光と呼ばれています――

イエスは言われた、「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、やみの中を歩くことがなく、いのちの光を持ちます」(ヨハネ八・一二)。

わたしが世にいる間、わたしは世の光です(ヨハネ九・五)。

イエスは……言われた……「まだしばらくの間、光はあなたがたとともにあります。あなたがたに光がある間に、歩きなさい。やみがあなたがたを捕えないように。……あなたがたに光があるとき、光を信じなさい、あなたがたが光の子どもであるために。……わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、やみの中にとどまらないためです」(ヨハネ一二・三五、三六、四六)。

光は世に来た。しかし、人間たちは光よりもむしろやみを愛した(ヨハネ三・一九)。

ヨハネは主について、

これはまことの光です、それはすべての人間を照らします(ヨハネ一・四、九)。

暗やみに座っていた民は、偉大な光を見た。彼らに……死の陰に座っていた者たちに、光が昇った(マタイ四・一六)。

＊1　天界の中のすべての光は太陽としての主からのものである(一〇五三、一五二一、三一九五、三三四一、三六三六、三六四三、四四一五、九五四八、九六八四、一〇八〇九番)。
主から発出する神的真理は、天界の中で光として見られ、天界のすべての光をもたらす(三一九五、三二二二、三二二三、五四〇〇、八六四四、九三九九、九五四八、九六八四番)。

＊2　天界の中の光は天使と霊の視覚と理解力を照らす(二七七六、三一三八番)。

＊3　天界の中の光は天使の知性と知恵にしたがっている(一五二四、一五二九、一五三〇、三三三九番)。
天界の中の光には天使の社会と同数のそれだけ多くの相違がある。善と真理に関して、したがって知恵と知性に関して、絶え間のない変化が天界の中にあるからである(六八四、六九〇、三二四一、三七四四、三七四五、四四一四、五五九八、七二三六、七八三三、七八三六番)。

わたしは、あなたを民の契約として、異邦人の光として与える（イザヤ四二・六）。
わたしは、あなたを異邦人の光として立てた。あなたが地の果てにまで、わたしの救いとなるためである（イザヤ四九・六）。
救われた国民は、その方の光の中を歩く（黙示録二一・二四）。
あなたの光とあなたの真理を送り、それらで私を導いてください（詩篇四・三）。

これらやまた他の箇所で、主は神的真理から光と呼ばれ、同じく、主からの真理そのものも光と言われています。

光は天界の中に太陽としての主から存在するので、それゆえ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの前で変容されたとき、
その方の顔は太陽のように見られ、その方の衣は光のようで、雪のように輝き、白く光り、地のさらし屋が白くすることができないほどであった（マルコ九・三、マタイ一七・二）。

主の「衣」がこのように見えたのは、衣が天界の中で主からのものである神的真理を表象したからでした――さらにまた、みことばで「衣」は真理を意味します。[*4] ここから、ダビデの書で言われています、
エホバよ、あなたは〝光を衣のように〟着られます（詩篇一〇四・二）。

一三〇　天界の中の光は霊的なものであり、その光が神的真理であることは、人間にもまた霊的な光があり、神的真理から知性と知恵の中にいるかぎり、彼にその光からの照らしがあることからもまた結論するこ

とができます――人間の霊的な光は彼の理解力の光であり、その対象は真理であって、それを秩序の中で分析的に整え、論証へと形作り、それらから連続的に物事を結論します。[*5]

自然的な人は、理解力がこのようなものを見るのは真の光からであることを知りません、目でその光を見ないし、思考の中にも受け入れないからです――それでも、多くの者は霊的な光について知っており、そしてまた、それを自然的な光から区別してもいます。霊的でなく自然的に考える者は、自然的な光の中にいます――世だけに目を向け、すべてのものを自然に帰す者は、自然的に考えます。けれども、天界に目を向け、すべてのものを神性に帰す者は、霊的に考えます。

＊4　みことばの中で「衣服」は、善をおおうので、真理を意味する（一〇七三、二五七六、五二四八、五三一九、五九五四、九二一六、九九五二、一〇五三六番）。
変容のときの主の衣は、その方の神的愛から発出する神的真理を意味した（九二一二、九二一六番）。

＊5　天界の光は人間の理解力を照らす。それゆえ、人間は理性的である（一五二四、三一三八、三一六七、四四〇八、六六〇八、八七〇七、九一二八、九三九九、一〇五六九番）。
理解力は真理を受け入れるものであるので、照らされる（六二二三、六六〇八、一〇六五九番）。
理解力は人間が主からの善の中の真理を受け入れるほど照らされる（三六一九番）。
理解力は善からの真理がどのようなものであるかによってそのようなものであり、それらの真理から形作られる（一〇〇六四番）。
世からの光が視覚にあるように、天界からの光が理解力にある（一五二四、五一一四、六六〇八、九一二八番）。
主からの天界の光は常に人間のもとにある。しかし、人間が善からの真理の中にどれだけいるかによってそれだけ流入する（四〇六〇、四二一四番）。

心を照らし、自然の光と呼ばれる光（ルーメン）から明白に区別されたものが真の光（ルークス）であることを、私は何度も知覚し、見ました――私はその光の中に、内的に、段階を通して高揚されたことがあります。私が高揚されるにつれて、理解力は照らされ、以前には知覚しなかったものまでも知覚し、ついにこのような自然的な光からの思考では決して把握できなかったものまでも知覚しました。時々、私は、天界の光の中ではっきりと明確に知覚されたものが〔あとになって〕把握できないことにいら立ちました。*6

理解力には光があるので、それゆえ、目について言えることと似たことが理解力についても言えます。例えば、知覚するとき、「見る、光の中にある」と言い、知覚しないとき、「それには暗いものや陰がある」と言い、また似たような多くのことが言えます。

一三一　天界の光は神的真理なので、それゆえまた、その光は神的知恵と神的知性です。ここから、天界の光の中に高揚されることによって、知性と知恵の中に高揚され、明るくされることと同じことが意味されます。それで、天使の光は、彼らの知性と知恵にしたがってまったく同じ段階にあります。

天界の光は神的知恵なので、それゆえ、すべてのものはどんなものであるか天界の光の中で知られ、それぞれの内的なものがどんなものであるか、そこでは顔の中にはっきり見え、最小のものも隠れていません。

さらにまた、内的な天使は、善以外に欲しないので、自分たちのすべてのものがはっきり見えることを愛しています――善を欲しない低い天界の者は異なっていて、彼らは天界の光の中で見られることを非常に恐れます――驚くべきことですが、地獄の中にいる者は、彼らの間では人間のように見られ、天界の光の中では、恐ろしい顔と恐ろしい身体の怪物のように、完全に自分の悪の形をして見られます。*7

人間もまた自分の霊に関して、天使に眺められるとき、同様に見られます。もし善良であるなら、その善にしたがって美しい人間として見られ、もし邪悪であるなら、怪物として、その悪にしたがって醜く見られます。

ここから、すべてのものは天界の光の中で現わされることが明らかです。天界の光は神的真理であるので、現わされるのです。

一三二　神的真理は天界の光であるので、それゆえ、すべての真理はどこにあっても、天使の中にあるいは外に、さらに天界の中にあるいは外にあっても、輝いています――それでも、天界の外の真理は、天界の中の真理のようには輝きません。天界の外の真理は、天界の中の真理のように本質を善から得ていないので、冷たく、熱のない雪のように輝きます。それで、それらの冷たい光は天界の光が注がれると消え、もし悪が隠れているなら、暗やみに変わります。私は真理の輝きについて他にも数回、多くの注目すべき出来事を見たことがありますが、それらについて、ここでは割愛します。

---

*6　人間は感覚的なものから高揚されるとき、穏やかな光の中へ、ついには天界の光の中へやって来る（六三一三、六三一五、九四〇七番）。
人間が知性の中へ高揚されているとき、実際に天界の光の中へ高揚されている（三一九〇番）。
私が世俗の考えから導き出されたとき、どれほど大きな光を受けたか（一五二六、六六〇八番）。

*7　地獄の中で自分自身の光（ルーメン）の中にいる者は、その光は石炭の火からのような光であるが、自分自身が人間のように見える。しかし、天界の光（ルークス）の中では怪物のように見える（四五三一、四五三三、四六七四、五〇五七、五〇五八、六六〇五、六六二六番）。

一三三　今から、天界の熱について述べます。

天界の熱の本質は愛です。太陽としての主から発出する熱は、主の中の神的愛、主からの神的愛であることは前章で示しました――ここから、天界の熱は、天界の光と等しく、霊的であり、同じ源泉からのものであることが明らかです。[*8]

太陽としての主から発出する二つものである神的真理と神的善があり、天界の中では、神的真理は光として、神的善は熱として現存します。しかし、神的真理と神的善は、二つではなく一つの存在であるかのように結合しています。それでも、天使のもとで分離しています、神的真理よりも神的善を多く受ける天使と神的善よりも神的真理を多く受ける天使がいるからです――神的善を多く受ける者は主の天的な王国の中に、神的真理を多く受ける者は主の霊的な王国の中にいます。最も完全な天使は、二つとも同じ程度に受けています。

一三四　天界の熱は、天界の光のように、どこでも変化していて、天的な王国と霊的な王国とでは別であり、そこのそれぞれの社会の中でも別々であって――段階だけでなく性質もまた異なっています。主の天的な王国の中では、さらに強烈で、さらに純粋です、そこの天使は神的善をより多く受けるからです。主の霊的な王国の中では、強烈さと純粋さは少なくなっています、そこの天使は神的真理をより多く受けるからです。それぞれの社会の中でもまた、受け入れにしたがって異なります。

熱は地獄の中にもまたありますが、不潔です。[*9]

天界の中の熱は〝聖なる火や天界の火〟によって意味され、地獄の熱は〝不浄な火や地獄の火〟によって意味されます。両者によって愛が意味され、天界の火によって主への愛と隣人に対する愛が、またその愛からのすべての情愛が意味され、〝地獄の火〟によって自己愛と世俗愛が、またその愛からのすべての欲望が意味されます。[*10]

愛が霊的な起源からの熱であることは、愛にしたがって熱くなることから明らかです。人間は愛の量と質にしたがって火をつけられ、熱くなり、攻撃されるときその熱が示されるからです。ここから、善の愛からの情愛について、また悪の愛からの欲望について語るときはいつでも、〔その情愛や欲望が〕「火をつけられる、熱くなる、燃える、沸騰する、燃え出す」と言うことが一般に受け入れられています。

一三五　太陽としての主から発出する愛が天界の中で熱として感じられることは、天使の内的なものが主からの神的善からの愛の中にあり、そこから外的なものも熱の中にあって熱くなるからです――それは、天界の中で熱と愛が互にこのように対応しているからです。天界のそれぞれの者は、すぐ前に述べられたことにしたがって、どのような愛の中にいるかによって、そのような熱の中にいます。

＊8　世の太陽と天界の太陽から、二つの熱源があり、二つの光源もまたある(三三三八、五二一五七三二四番)。太陽としての主からの熱は、愛に属す情愛である(三六三六、三六四三番)。ここから、霊的な熱は、本質では愛である(二一四六、三三三八、三三三九、六三一四番)

＊9　地獄の中に熱がある、しかし不潔である(一七七三、二七五七、三三四〇番)――ここからの臭いは、世の中の糞や排泄物の臭いのようであり、最悪の地獄の中では死体の臭いのようである(八一四、八一九、八二〇、九四三、九四四、五三九四番)。

＊10　ここには一一八番の＊2と同じ記号が振られている。

世の熱は、あまりに粗野であり、自然的であって霊的でないので、まったく天界に入りません。しかし、人間のもとでは異なります、人間は霊界にいるのと同じく自然界にもいるからです。人間は、自分の霊については完全に自分の愛にしたがって熱くなります、しかし、身体については自分の霊の熱と同じく世の熱から、この両方の熱から熱くなります。対応する霊の熱が世の熱の中に流入します。

両方の熱に対応するものがどんなものであるかは、動物から明らかにすることができます。それらの愛は、その主要なものはその種族の子孫を生み出すものであって、世の太陽からの熱が現存し、流れ込むのにしたがって勢いよく出てきて、働きます。その熱は春と夏の時だけに存在するものです。

流入する世の熱が愛をひき起すと信じる者は、最大に欺かれています。なぜなら、霊的なものの中へ自然的なものは流入しないで、自然的なものの中へ霊的なものが流入するからです——前者の流入は神的な秩序に反しています、けれども、後者の流入は神的な秩序からのものです。[*11]

一三六　天使に、人間のように理解力と意志があります。天界の光は神的真理であり、ここから神的知恵であるので、天界の光は天使の理解力のいのちをつくります。天界の熱は神的善であり、ここから神的愛であるので、天界の熱は天使の意志のいのちをつくります——天使のいのちそのものは、熱からであり、光に熱が内在しないかぎり、光からではありません。いのちが熱からであることは明らかです、なぜなら、熱を取り去ると、いのちは消えるからです。

愛のない信仰も、すなわち、善のない真理も同様です。なぜなら、信仰のものと呼ばれる真理は光であり、愛のものと呼ばれる善は熱であるからです。[*12]

これらは天界の熱と光に対応する世の熱と光からさらにはっきりと明らかです。光と結合した世の熱から、地上のすべてのものは生気を与えられ、栄えます。春と夏の時にその熱と光は結合しています。しかし、熱から分離した光からは、すべてのものは何も生気を与えられないで、栄えず、無活動であり、死にます。冬の時に熱と光は結合していません、その時、熱はなくて光が存在し続けます。

地上の春の時の熱に結合した光のように、天界では、真理は善と、すなわち、信仰は愛と結合しているので、その対応から天界は楽園と呼ばれます。

それでこれらから、以前の章(一三〜一九番)で述べた「天界での主の神性は、主への愛と隣人に対する仁愛である」ことについて、その真理が、はっきりと明らかです。

---

*11　物質的な流入でなく、霊的な流入がある。このように、自然界から霊界の中へではなく、霊界から自然界の中への流入がある(三二一九、五一一九、五二五九、五四二七、五四二八、五四七七、六三二二、九一一〇番)。

*12　善のない真理は、いのちがないので、本質的に真理ではない。というのは、すべての真理のいのちは、善からであるから(九六〇三番)。

このように、あたかも霊魂のない身体のようなものである(三一八〇、九一五四番)。

善のない真理は、主により受け入れられない(四三六八番)。

善のない真理がどんなものか、そのように愛のない信仰がどんなものか、善からの真理がどんなものか、あるいは愛からの信仰がどんなものか(一九四九〜一九五一、一九六四、五八三〇、五九五一番)。

真理は信仰のものであり、善は愛のものであるので、あなたが真理または信仰と言っても、あるいは善または愛と言っても同じことになる(二八三九[a]、四三五二、四九九七、七一七八、七六二三、七六二四、一〇三六七番)。

注a その後、「二八三九番」は著者自身により削除された。著作『最後の審判』の中の三九番に続く、意志と理解力についての抜粋を見よ。

一三七　「ヨハネ福音書」に言われています、

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。……すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方に、いのちがあった。このいのちは人の光であった。……この方は世におられ、世はこの方によって造られた。……ことばは肉となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た（一・一、三、四、一〇、一四）。

「ことば」によって意味されるものが主であることは明らかです、なぜなら、「ことばは肉になった」と言われているからです――けれども、「ことば」によって特に何が意味されるかは、まだ知られていないので、述べます――ここでの「ことば」は神的真理であり、それは主の中のもの、主からのものです。[*13] それゆえ、ここでもまた〝光〟と呼ばれているのです。光が神的真理であることは本章の前の部分で示しました。

すべてのものが神的真理によってつくられ、創造されたことは、今から説明します。

［2］天界の中で、すべての力は神的真理にあり、真理がないなら、力はまったく何もありません。[*14]

すべての天使は神的真理から力と呼ばれ、そしてまた真理をどれだけ受け入れているか、その容器となっているかによって、それだけ力があります――その力によって地獄に勝ち、対抗するすべての者に勝ちます。千の敵ですら、神的真理である天界の一つの光線に耐えることはできません。

天使は神的真理を受け入れるから天使であるので、全天界は〔真理とは〕別の源泉から存在するのではないことがいえます、なぜなら、天界は天使から存在するからです。

［3］真理について思考や言葉のような観念しかもたない者は、神的真理にこれほど大きな力が内在するこ

とを信じることができません。真理それ自体には、服従からその真理を行なおうとするのでないかぎり、力は内在しません。しかし、神的真理には、それによって天界や世がそれらの中にあるすべてのものとともに創造されたような、そのような力が、それ自体に内在します。

神的真理にこのような力が内在することは、二つの比較によって、すなわち、人間の中の真理や善の力と世の中の太陽からの光や熱の力によって、説明することができます。

人間の真理や善の力によって――

人間が行なうどんなことでもすべて、人間は理解力と意志から行ないます。善によって意志から、真理によって理解力から行ないます。意志の中にあるすべてのものは善と関係し、理解力の中のすべてのものは真理と関係するからです。[*15] そこで人間は善と真理から全身を動かし、全身にある何千ものものが善と真理の指図と意のまま

＊13　聖書の中の「ことば」は、いろいろなことを意味する。すなわち、言葉・心の思考・実際に存在するすべて事柄、さらに何らかのもの、そして最高の意味で神的真理、そして主を意味する（九九八七番）。
「みことば」は、神的真理を意味する（二八〇三、二八九四、四六九二、五〇七五、五二七二、九三八三、九九八七番）。
「みことば」は、主を意味する（二五三三、二八五九番）。

＊14　主から発出する神的真理には、すべての力がある（六九四八、八二〇〇番）。
天界の中のすべての力は、善からの真理のものである（三〇九一、三五六三、六三四四、六四二三、八三〇四、九六四三、一〇〇一九、一〇一八二番）。
天使は、主からの神的真理の受容から、力と呼ばれ、そしてまた力である（九六三九番）。
天使は、主からの神的真理を受け入れるものであり、それゆえ、みことばの中のあちこちで神々と言われる（四二九五、四四〇二、七八七三、八一九二、八三〇一番）。

に自発的に突進するようになります。ここから、全身は善と真理に役立つために形作られ、その結果、善と真理から形作られていることが明らかです。

［4］**世の太陽からの熱や光の力によって**——

木・穀物・花・草・果実や種子のような、世で生長するすべてのものは、太陽の熱と光による以外の他の源泉からは存在しません。ここから、それらにどのような生み出す力が内在するか明らかです——まして、神的真理である神的光に、また神的善である神的熱に、生み出す力がないでしょうか？ それらから天界は存在し、世もまた存在するからです。なぜなら、前に示したように、世は天界によって存在するからです。

ここから、みことばによってすべてのものが造られたこと、それがなくて造られたものは何もなかったこと、さらにまた主によって、すなわち、主からの神的真理によって世が造られたことは、どのように理解しなくてはならないか、明らかにすることができます。*16

ここからもまた、「創造の書」の中で、最初に光について、また続く中で、光からのものについて言われているのです（創世記一・三、四）。

そしてまたここから、天界と同じく世でも全世界のすべてのものは、何らかのものであるためには、善と真理に、またそれらの結合に関係しています。*17

一三九* 天界の太陽としての主からの神的善と神的真理は、主の中にはなくて、主から存在することを知らなくてはなりません——主の中には神的愛だけがあり、それはエッセ（存在）であり、そのエッセから神的善と神的真理が存在するようになります。エッセから存在するようになることは発出することによって意味

されます。

このこともまた世の太陽との比較によって説明できます——世の熱と光は太陽の中になくて、太陽から存在します——太陽の中には火だけがあり、その火から熱と光は存在するようになり、発出するのです。

＊初版にはこのように番号が振られています（**一三八**番は見当たりません）。

一四〇 太陽としての主は神的愛であり、神的愛は神的善そのものであるので、それゆえ、その方から発出する神性は、天界の中の神性そのものであり、区別のために神的真理と呼ばれますが、それでも神的善は神的真理と結合しています。

この神的真理はその方から発出する聖性と呼ばれるものです。

＊15 理解力は真理を受け入れるものであり、意志は善を受け入れるものである（三六二三、六一二五、七五〇三、九三〇〇、九九三〇番）。

それゆえ、理解力の中のすべてのものは、真理であろうと、あるいは人間が真理と信じるものであろうと、真理に関係する。意志の中のすべてのものは、同様に善に関係する（八〇三、一〇一二二番）。

＊16 主から発出する神的真理は、唯一の実在するものである（六八八〇、七〇〇四、八二〇〇番）。

すべてのものは、神的真理によってつくられ、創造された（二八〇三、二八八四、五二七二、七六七八番）。

＊17 ここには一〇七番の＊2と同じ記号が振られている。